



Title	学生からみたへき地・小規模校理解の促進の方策と若手教師の課題： 自由意識調査の段階的分類法による傾向分析
Author(s)	川前, あゆみ
Citation	釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要，第43号：1-6
Issue Date	2011-12
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2869
Rights	

学生から見たへき地・小規模校理解の方策と若手教師の課題 ー自由意識調査の段階的分類法による傾向分析ー

川 前 あゆみ

北海道教育大学釧路校地域学校教育専攻

Cultivation of Sympathy for Rural Small School Education and Planning; With Method of Cluster Free Answer

Ayumi KAWAMAE

Hokkaido University of Education Kushiro Campus

要 旨

本論文は、学生から見た若手教師のへき地・小規模校理解の方策と定着の条件を明らかにすると共に、学生時代にへき地理解を進めるための条件を明らかにすることを課題としている。そして、本研究は、若手教師がへき地地域とへき地・小規模校の特性を理解し、へき地・小規模校に定着する条件をとらえる研究の一環として行う研究である。

一般的に若手教師は経験が浅いために、どこの学校に赴任したとしても、経験不足から生じる困難を克服する方法や指導力を高めるための研修や支援方策は必要となる。さらにへき地・小規模校に赴任した場合には、地域環境と学校運営・学校指導等の方法の違いから、いっそうの戸惑いや困難さを感じてしまう場合も少なくない。このような中では、若手教師がへき地・小規模校を理解し、へき地校に定着するための特別な配慮と施策が不可欠となる。

本稿では、自由記述内容を一つ一つの文単位で意味をとらえて、それを小分類し、さらにそれを中分類して、最終的には大分類するという段階的な分類を何度も経て集計した。これは記述式回答に対応したKJ法的な分類の応用である。

このような分析方法を踏まえて、以下、若手教師の指導力量を高める施策と条件、教職員の人間関係と若手教師の居場所をつくるための施策と条件、若手教師が地域に入れるようにする施策と条件、の3つの点で学生から見た若手教師の成長環境と条件をとらえた。さらに、それらを踏まえて、学生時代にへき地とへき地小規模校への理解を進めるために、どのような施策を学生に施すことが望ましいかを、学生自身に聞くことによって定着の条件をとらえた。

1. 課題と方法

本稿の課題は、学生から見た若手教師のへき地・小規模校理解の方策と定着の条件を明らかにすると共に、学生時代にへき地理解を進めるための条件を明らかにすることを課題としている。本研究は、若手教師がへき地地域とへき地・小規模校の特性を理解し、へき地・小規模校に定着する条件をとらえる研究の一環として行う研究である。

一般的に若手教師は経験が浅いために、どこの学校に赴任したとしても、経験不足から生じる困難を克服する方法や指導力を高めるための研修や支援方策は必要となる。さらにへき地・小規模校に赴任した場合には、地域環境と学級運営・学習指導等の方法の違いから、いっそうの戸惑いや困難さを感じる場合も少なくない。

このような中では、若手教師がへき地・小規模校を理解し、へき地校に定着するための特別な配慮と施策が不可欠となる。その場合に管理職をはじめとして、学校全体としての施策を検討しなければならないが、受け手である若手

の意識や若手が求める施策も重要なメルクマールとなる。とりわけ新任教師として赴任する前の学生が、マイナスイメージを含めて持っているへき地・小規模校に対して、どのような理解と定着のための配慮・施策を求めているかをとらえることは重要である。実際に赴任した場合の学校の条件は、必ずしもイメージした場合と異なることは当然ではある。それでも事前に、へき地理解と定着の条件を意識しておくことは、学生がへき地・小規模校に赴任する場合の具体的な課題の所在を意識することにつながり、自覚的に課題への対応を施すことができる。

ここでは、へき地教育論を受講している1年生180名に対して、自由記述方式で意識調査を行った。とらえる意識調査の全体的な内容は、若手教師がへき地・小規模校に定着するために、学校全体で取り組んだ方が良いと考える施策・配慮である。

一般的な調査分析としては、アンケート・参与観察・聞き取り・ケーススタディなどがある。その中のアンケート

分析は、選択式アンケート項目による集計解析と、自由記述式アンケート項目の方法がある。選択項目では、数量的な集計を行いやすいが、具体的な意識実態が見えにくい。一方自由記述項目は、数量的に扱いにくい。自由記述式項目においても、キーワードをコンピュータで拾い出して、数量的に集計するという方式もあるが、本稿ではその方法を採用していない。

本稿では、自由記述内容を一つ一つの文単位で意味合いをとらえて、それを小分類し、さらにそれを中分類して、最終的に大分類するという段階的な分類を何度も経て集計した。これは記述式回答に対応したKJ法的な分類の応用である。

アンケート選択項目式ではなく、自由記述の段階的集計を行う理由は、元々学生の意識において、へき地・小規模校への赴任自体が必ずしも希望されているものではなく、選択式にしてとらえても、深層意識の程度の実態があまり出てこないからである。また若手教師の定着に関しては、先行研究においても未開拓の分野であり、定着の方法論が確立されているわけでもないために、選択項目式では、対応方法が限定されてしまうからである。

このような分析方法を踏まえて、以下、若手教師の指導力量を高める施策と条件、教職員の人間関係と若手教師の居場所をつくるための施策と条件、若手教師が地域に入れるようにする施策と条件、の3つの点で学生から見た若手教師の成長環境と条件をとらえていきたい。さらに、それらを踏まえて、学生時代にへき地とへき地・小規模校への理解を進めるために、どのような施策を学生に施すことが望ましいかを、学生自身に聞くことによって定着の条件をとらえたい。

なお北海道教育大学釧路校の学生は、すでに1年生の5月から毎週金曜日に1日学校現場に入る「教育フィールド研究」やへき地・小規模校に赴く「新入生研修」を実施している。そのため、学生はある程度自分の力量の未熟さと比べた、学校現場の課題と教師の役割の大きさについて、実感的にとらえている。

2. 若手教師の力量形成と定着の構成要素

へき地・小規模校における教師が定着するためには、若手教師がへき地・小規模校において安定した教育実践を施し、居心地の良い職場環境を作っていく必要がある。そのための構成要素としては、次の3点があげられる。

第一に、へき地・小規模校での指導方法は独特のものがあるために、へき地・小規模校に対応した力量を向上させるために学習や研修が必要となる。一般的に若い教師はどこにおいても実践が未熟で不安を抱えているが、へき地・小規模校においては、指導力量自体に不安を伴っている。全体的に若い教師が多いために、指導技能の伝承が学校の中でなし得にくく、学校外の情報や研修機会を設けていくことが必要になる。一方、若い教師が多いことは、校内で対等で議論しやすい校内研修の条件を有しており、そのこ

とをうまく使えば、へき地・小規模校においても若手教師の指導力量を高めることができる。

第二に、学校における教職員どうしの人間関係や居心地の良い学校づくりが、若手教師の意欲や高めあう競争にもつながるために、教職員の人間関係づくりを高め合える環境や雰囲気が必要になる。そのような人間関係や居心地の良い学校づくりを豊かに展開すれば、へき地・小規模校の特色を生かしたカリキュラムや指導方法などの教育課程を進めることができる。

第三に、へき地・小規模校では、学校と地域の関係が密接であり、若手教師が地域に溶け込むことが、若手教師の居心地の良さを作る上で重要である。地域からも評価されて若い教師も成長していく。そのためにも、若い教師が地域の中に溶け込める契機と条件を作っていくことが若手教師の定着性を高める条件となる。

以上の3つの点が、若手教師がへき地・小規模校に定着できる環境として重要な要素となる。さらに第四に、このような若手教師がへき地・小規模校を理解し、定着できる条件を高めていくためにも、学生の時代からある程度、へき地地域及びへき地・小規模校の特性を理解し、その実際の指導方法を体験することが求められる。したがって、学生時代からへき地の学習や体験を施す、体系的なへき地教育プログラムを構築することは、へき地に赴任する若手教師の養成を行う教育大学において重要な課題となる。

以下、前述の4点に関して、それぞれ次項以降で学生の自由意識調査を基にしてとらえていきたい。

3. 学生自由記述から見た若手教師の指導力量向上の施策と課題

若手教師は、どこの学校に赴任しても指導力量が未熟なために、自分の指導力量を向上できるかどうかにかまわず関心がある。また自分の指導力量が向上できれば、徐々に自己肯定感が高まり、職場環境としても居場所を感じるものである。

学生への質問では、「若手教師が多い中で若手教職員の指導力量を高めていくためにはどのようなことを施しますか」の質問を自由記述式で行った。自由記述の段階的集計の結果は、表1の通りである。

その自由記述の分類の中で最も多かった項目が、「授業研究会や研修会・勉強会を開いて指導力を高める」の102人である。この研修会や勉強会は、へき地複式教育に限らず、学校教育活動全般や基本的な指導技術を含むものである。若手教師の場合は、基本的にどこの学校に行っても、自分の指導技術を上げることが求められる。したがって、この指導力量をあげるための研修会・勉強会は、どこの学校でも不可欠であるが、へき地に赴任して、へき地の指導力量を向上できない場合には、へき地・小規模校への赴任や長期的な定着を忌避する可能性がある。

2番目に多い項目は、「先輩教員の授業参観や経験談の交流」の81人である。指導力量を高めるためにも、実際の

表1	若い教師が多い中で、教職員の指導力量を高めていくためにはどのようなことを施しますか	人数
1	授業研究会や研修会・勉強会を開いて指導力を高める	102
2	先輩教員の授業参観や経験談の交流	81
3	地域への情報発信や地域授業参観を通して地域と協力した授業を作る	70
4	模擬授業・研究授業参観・ビデオ収録研修でアドバイスをもらう	69
5	若い教師が相談したり、教師どうしが会話・協力できる雰囲気をつくる	53
6	地域施設・地域情報・地域文化、地域の自然を生かした教育活動の研修を行う	46
7	他のへき地校と研究会を開くことや交流により様々な情報交換をする	43
8	若い教師のパワーを生かし、若手の研修会・学習会を開く	32
9	担任を受け持ち、子どもと接する時間を多くして子ども理解に努める	32
10	週案指導計画や指導案・教材資料のアドバイスを受けて、添削してもらう	27
11	授業参観で保護者の意見をもらったり、地域のひとへき地・地域のひとと教材開発を行う	26
12	教職員の飲み会・食事会・行事等の交流機会を設定する	23
13	管理職やベテラン教師が、質問タイムや不安を解消させる意見交流の場を設ける	14

※1. 2010年7月の1年生対象による自由記述式アンケート調査による集計。回答者は、全体で180人。

先輩の授業や経験談は、学校・子どもに適した指導内容を踏まえており、具体的で身近なイメージをつくりやすい。へき地・小規模校では、実際に合同で授業をしたり、隣の教室を見る時間・機会も多く、教師が相互に実践的な活動を参考にしやすい環境がある。

3番目に多い項目は、「地域への情報発信や地域授業参観を通して地域と協力した授業を作る」の70人である。へき地・小規模校では、地域との関係が強いことを、学生はすでに感じ取っている。地域と連携することで、地域に適した授業内容や保護者・地域住民に支えられる授業が展開できれば、地域と連携する意味合いも高まっていく。そのためには、若手教師が自分から地域の中に気軽に入っていく、地域に情報を伝えていく力量も重要である。このように地域に情報を伝え、地域から協力を得ることで、地域に応じた自分の授業開発を進めることができる。そのことが定着性を高めていく。

4番目に多い項目は、「模擬授業・研究授業参観・ビデオ収録研修でアドバイスをもらう」の69人である。この項目は、1番目に多い「授業研究会や研修会・勉強会を開いて指導力を高める」とこと関係するもので、さらに具体的な授業研究の方法論として、模擬授業・授業参観・ビデオ収録研修の形で授業研究が展開するものである。ビデオ収録による研修などは、ビデオに撮った自分の授業を自分で見て課題を確認したり、他の教師に見てもらってアドバイスを頂いたりすることができる。日中の授業時間中は、全教師が同時に授業を進めるために、授業でのアドバイスを受けにくく、そのため、授業に関しては特に、ビデオで撮った記録を見ながらでも、自分のやり方に対するアドバイスが欲しいと考えるものである。

5番目に多い項目は、「若い教師が相談したり、教師どうしが会話・協力できる雰囲気をつくる」の53人である。研修は本来、特定の時間と場所だけが研修機会ではなく、日常的な実践の中で気軽に相談したり、会話する中でヒントが生まれやすくなる。特に教師の実践は、毎日が新しい出来事であり、その瞬間の対応として臨機応変な対応を求められることが多い。したがって、その瞬間に対応に困ったことを他の教師に尋ねることができれば、若手教師もより適確な判断力を身につけていくことができる。このように若い教師が相談・会話できる雰囲気は、若手教師の指導力量の向上にとって重要である。

6番目に多い項目は、「地域施設・地域情報・地域文化、地域の自然を生かした教育活動の研修を行う」の46人である。へき地では、博物館・科学館等の専門施設や社会教育施設が少なく、そのため専門家を直接依頼することも限られてくる。一方へき地では、地域の公共施設・自然環境などは学習教材として、活かしやすい地域的な条件がある。また地域住民も学校に協力的である。これらの地域の素材を活かした教育活動は、子どもの地域への愛着心や誇りを高め、地域と学校との関係を良好なものにしていく条件でもある。これらの地域を活かした教育活動を行える力量も、へき地・小規模校の指導力量を高めていく条件となる。

以上のように、研究・研修や、教職員間の交流、地域との連携などによって、学校の職場の人間関係と居心地のよい職場環境づくりを基盤にして、指導力量を向上させていくことが、若手教師のへき地・小規模校への赴任と定着を促す条件となる。

4. 学生自由記述から見た教職員の人間関係づくりと居心地の良い学校づくり

若手教師にとっては、立場が弱いだけに、学びの場としての職場の人間関係や居心地の良さは、成長にとって大きな条件となる。学生への質問では、「教職員どうしの人間関係を高め、若い教師にとって居心地の良い学校づくりをするために、どのようなことを施しますか」という質問を自由記述式で行った。自由記述の段階的・分類集計の結果は、表2の通りである。

もっとも多い項目は、「話し合いの場を設け子ども理解を深める」の55人である。子どもの共通理解を深めることは、指導方針においても、共通の方法や協働体制を高めやすい。したがって、子どもの見方を中心とした話し合いの場を設けることは、指導方針の相違を埋めていく条件になる。そのことが居場所のある学校づくりにつながっていく。

2番目に多い項目は、「飲み会やレクを行うことで親睦を深める」の44人である。どこの職場でも、飲み会やレクレーションも個別に楽しむ傾向が社会的風潮として強くなった。学校の世界でも飲み会が減少したと言われている。意識的に飲み会などを設定していかなければ、若手教師はレクレーションの場もないために、緊張感だけが強くなってしまふ。へき地・小規模校だからこそ、飲み会やレクを

	人数
1 話し合いの場を設け子ども理解を深める	55
2 飲み会やレクを行うことで親睦を深める	44
3 文化祭・体育祭・全校学習等の学校行事を豊かにする	39
4 地域行事への参加など保護者や住民との交流を豊かにする	32
5 野外活動・キャンプを通して様々な触れ合いを増やす	30
6 職員室の雰囲気をつかひものにし、新任教員の居場所づくりをする	29
7 研究会を多く設定し、ベテラン教師が若い教師に指導する	25
8 積極的な挨拶や会話を増やす	23
9 学校を開放し、地域全体で子どもを育てる雰囲気をつくる	18
10 新しい活動を企画して実際に試させる	14
11 他校との研究交流をする	13
12 子どもと遊ぶ時間を増やし個に応じた指導を豊かにする	12
13 若い教師にその地方の文化、特色を教える	7
14 学校の中での役割の明確化と環境整備	6

※1. 2010年7月の1年生対象による自由記述式アンケート調査による集計。回答者は、全体で180人。

意識的に設定していくことも重要な職場の居場所をつくる条件となる。

3番目に多い項目は、「文化祭・体育祭・全校学習等の学校行事を豊かにする」の39人である。学校行事は、教職員にとっても一つの節目であり、達成感や一体感を高めるものとなる。したがって、この行事を豊かにすることは、子どもや地域の喜びとなることに加えて、若手教師の喜びとなる。そのことが、一体感のある人間関係づくりと居心地の良い学校づくりとなる。

4番目に多い項目は、「地域行事への参加など保護者や住民との交流を豊かにする」の32人である。へき地・小規模校では、学校行事だけでなく、祭りや収穫祭などの地域行事も学校行事と一体となっている地域が多い。地域行事の後には、住民の懇親会を行う地域も多く、教職員もそのような懇親会に出て地域との交流を深めている。このような地域行事も、若手教師と地域住民が交流し、地域全体から若手教師が認められる条件となる。そのため、地域行事に関わって、保護者・地域住民と関わる力も、若手教師にとって重要な力量となる。

5番目に多い項目は、「野外活動・キャンプを通して様々な触れ合いを増やす」の30人である。へき地・小規模校では、子ども達の自然体験活動・野外教育・校庭キャンプなどの取り組みも多く、それらの行事・レクリエーションも、子ども達だけでなく、教職員どうしの人間関係づくりにも重要な条件になる。若手教師が中心となって、そのような自然体験活動を積極的に企画しても良い。

これらの子ども理解を中心とした話し合いの場や、レクリエーション・学校行事・地域行事・野外活動などの機会を設定し、内容を豊かなものにしていくことが、若手を含めた教職員の人間関係をつくり、居心地の良い学校づくりを進めていく条件となるのである。

5. 学生自由記述から見た若手教師が地域に溶け込む条件
へき地・小規模校では、学校と地域のつながりも大きく、若手教師が地域に溶け込めるかどうか、へき地・小規模校に居心地の良さを感じる条件となる。学生への質問では、「若い教師が地域の中に溶け込めるようにするため、どのようなことを施しますか」という質問を自由記述式で行った。自由記述の段階的集計の結果は、表3の通りである。

	人数
1 地域施設の巡回・地域教材・地域体験学習等で地域理解を深め、地域から学ぶ雰囲気を作る	67
2 若い教師に地域行事に参加してもらう	58
3 学校と地域の共同で行事を行ったり招いたりする	55
4 行事後の交流会などを設けて地域の人と親しむ	53
5 地域ボランティアを大切に増やす	32
6 あいさつ運動やコミュニケーションを沢山とる	30
7 赴任してすぐに地域歓迎会を行う	28
8 若い教師と地域で交流を深める行事を行う	25
9 食事会や飲み会を行う	23
10 地域全体の学習会やPTA活動、開かれた学校づくりに取り組む	21
11 伝統行事や文化を学び地域を理解する	19
12 農作業などの勤労体験活動や自然キャンプを行う	18
13 若い教師に地域の課外授業や地域先生を活かした授業を行う	16
14 若い教師に年配者の経験を伝える	12
15 郷土料理等地域に根ざした総合学習の機会を増やす	10
16 家庭訪問の機会を増やす	10

※1. 2010年7月の1年生対象による自由記述式アンケート調査による集計。回答者は、全体で180人。

もっとも多い項目は、「地域施設の巡回・地域教材・地域体験学習等で地域理解を深め、地域から学ぶ雰囲気を作る」の67人である。若手教師自身が地域を知らなければ、地域に愛着を感じることはできない。また地域との連携は、単に人間関係としての連携だけでなく、具体的に何らかの子どもの教育活動に活かされなければ、時間的に負担を感じてしまう。そのため、地域教材や地域体験学習等をカリキュラムに活かされるように取り組むことで、地域に溶け込む条件もできてくる。

2番目に多い項目は、「若い教師に地域行事に参加してもらう」の58人である。へき地・小規模校の行事は、子ども達も多く参加しているが、教師が参加しないと子どもとの関係も地域住民との関係も疎遠になる。地域行事にも若手教師が参加できるような雰囲気を作って行き、また実際に誘うことによって、若手教師が地域に溶け込んでいく。若手教師の価値観としては、すでに一般的に自然に地域行事に参加するという価値観はなくなっている。そのため若手教師にはとりわけ意識的に誘っていかねば、地域行事に参加しないままになってしまう。

3番目に多い項目は、「学校と地域の共同で行事を行ったり招いたりする」の55人である。地域行事と同様に、学

校行事も、地域と教師が交流できる重要な機会である。へき地・小規模校の学校行事は、運動会や学芸会などが、地域との共催で開催されている学校が多く、これらの学校行事の中で、地域住民とうまく連携できるようにしていくことが、若手教師が地域と連携できる条件となる。

4番目に多い項目は、「行事後の交流会などを設けて地域のひとと親しむ」の53人である。この交流会は、学校行事・地域行事に付随するもので、へき地・小規模校では行事後にジンギスカンパーティーを開く場合が多い。行事後の達成感を高めるためにも、これらの交流会で、親睦を深めていくことも地域に溶け込む条件となる。

5番目に多い項目は、「地域ボランティアを大切にする」の32人である。地域ボランティアは、総合的な学習活動や特別活動の一環として、子ども達と一緒にやる場合が少なくない。子ども達が地域に入る学習活動の教育効果を高めるためにも、地域ボランティアを円滑に展開できるように調整していくことが重要である。

以上のように、地域教材・地域体験学習・地域ボランティア活動等のカリキュラムを、地域と連携して組み込むこと、学校行事・地域行事・交流会等を地域と連携して開催できるようにすること、等が、若手教師が地域に入りやすくする条件であると考えられている。地域に入りやすくすることが、へき地・小規模校や地域に定着できる条件であると考えられている。

6. 学生時代におけるへき地理解の促進の有効な方法とへき地教育プログラムの課題

最後に学生がへき地・小規模校を理解し、へき地・小規模校に定着していくようになるために、学生時代にどのような学習や教育活動を進めれば良いかを提案してもらった。学生への質問項目は、「若手教師がへき地・小規模校に定着するために、学生時代にへき地・小規模校を理解するための有効な方法として、どのようなことをすれば良いと思いますか」の質問で、自由記述式で回答してもらった。自由記述の段階的集計の結果は、表4の通りである。この大分類項目の中に、具体的な学習活動・体験活動内容・教育実践内容が含まれている。

学生時代におけるへき地理解を促進するための有効な方法として、もっとも多かった自由記述の項目は、「へき地のマイナス面の言説への意識転換」の145人である。一般的にへき地・小規模校は、マイナス面が多いというイメージや言説があるが、そのイメージの価値基準を転換したり、別の評価基準でへき地・小規模校をとらえると、マイナス面がプラス面としてとらえられたりする。これはいわゆる価値基準のパラダイム転換と言われるものである。へき地・小規模校をとらえる視点も、大規模校を標準として考えてしまう価値基準を、別な観点から見直していくことの必要性を、学生自身も考えている。

2番目に多い項目は、「へき地の特性・良さの認識」の107人である。この項目は、「へき地のマイナス面の言説へ

表4 学生時代のへき地理解を促進するための有効な方法に関する学生の意見

	大分類に属する項目	具体的な学習活動・体験活動内容・教育実践内容例	人数
1	へき地のマイナス面の言説への意識転換	へき地のプラス面の理解・マイナス面とされていることのプラス面への転換・別の観点でのへき地評価	145
2	へき地の特性・良さの認識	へき地校の良さの学習・へき地地域の良さの学習・偏見を取り除く学習・都市出身者の観点を超える観点を会得	107
3	へき地校訪問	へき地校1日参加研修・へき地校の運動会・文化祭・学芸会・学校祭・地域行事参加・へき地教育研究大会・へき地校授業参観	94
4	直接へき地の話を聞く	へき地勤務者の話・過去のへき地勤務者・へき地の若手教師・実習経験者・へき地出身学生・へき地の子ども・へき地住民	60
5	へき地校体験実習	へき地校での短期実習(1週間)・長期実習(2週間)・へき地の母校での主実習(5週間)	57
6	へき地の映像資料	ドキュメント・へき地のビデオ・へき地実習生の映像・へき地出身者・へき地映画・ビデオレターづくり・へき地の子ども作成映像	53
7	グループディスカッションとへき地体験企画作り	へき地に関する討論・多様な意見の違いの認識・自らのへき地に関する学習・へき地調査学習・へき地校への遊び・学習などの持ち込み企画・へき地まちづくりの提案活動	37
8	自然の中での遊び・体験	自然体験活動・キャンプ・山村留学経験・農業体験・地域環境保全活動・動物体験	30
9	地域住民との交流および地域理解	地域運動会や地域文化祭への参加・酪農祭等の行事への参加・へき地の住民との交流・バーベキュー等の地域レクリエーション交流・地域見学	29
10	大規模校のプラス面・マイナス面との比較	都市部のメリットとデメリットの検討・都市部の子どもの状況・都市経験者の話・都市部赴任理由の検討	28
11	へき地校の地域カリキュラムの創造とその経験	地域カリキュラムの経験・特色あるカリキュラムの経験・自然環境を生かしたカリキュラムの経験・都市ではできない教育活動・地域を誇りに思う総合的な学習	20
12	少人数の子どもとの関係	少人数の子どもとの信頼関係・少人数の学習指導経験・異学年交流団体の経験	14
13	個に応じた指導の経験	個々の子どもとの会話・個別指導・個別学習指導・個別相談・一人一人の観察	10
14	へき地の生活経験・居住経験	農村ホームステイ・へき地教育実習を通じた生活体験・農村地域活動	10
15	へき地の役場・専門家との交流	役場職員との交流・社会教育職員との交流・へき地教育の専門家との交流	7

※1. 2010年7月の1年生対象によるアンケート調査による集計。回答者は、全体で180人。

※2. 「若手教師がへき地・小規模校に定着するために、学生時代にへき地・小規模校を理解するための有効な方法として、どのようなことをすれば良いと思いますか」の問いに、自由記述箇条書きで回答。

の意識転換」と関連する項目である。マイナス面の基準や価値観を転換するだけでなく、都会・市街地ではできないような教育活動をとらえることによって、へき地・小規模校の特性や良さを認識することができる。

3番目に多い項目は、「へき地校訪問」の94人である。たとえ1日でもへき地・小規模校に訪問して、子どもと学校の様子を観察するだけでも、へき地・小規模校の雰囲気や特徴を感じることができる。へき地校の運動会・学芸会・地域行事などに参加するだけでも、学校と地域が一体となったへき地校の雰囲気をとらえることができる。実際に1日でもへき地に訪問した学生の中で、「元々抱いていたへき地のマイナスイメージが大きく変わった」という学生はかなり多い。まったくへき地・小規模校の様子を見たことがない学生にとっては、まず1度でもへき地校を訪ねてみるのが、へき地とへき地校理解につながると言える。

4番目に多い項目は、「直接へき地の話を聞く」の60人である。大学の講義でへき地・小規模校の特性等を学ぶだけでなく、へき地・小規模校の教員や過去に勤務した元教員等から話を聞くことで、へき地・小規模校の教育をリアルにとらえることができる。またへき地・小規模校出身の学生から、へき地での経験を子どもの側から聞くことも重要である。さらにへき地教育実習等で実習に行った上級生の経験談も、へき地を経験していない学生にとっては、身近な模範として参考になる。

5番目に多い項目は、「へき地校体験実習」の57人である。北海道教育大学では、オプションとして、「へき地校体験実習」というへき地教育実習を科目として設けている。本調査で回答した学生は、だれもへき地校体験実習を行った学生ではないが、すでに上級生等から、北海道教育大学釧路校においては、体系的にへき地校体験実習を行っていることは聞いている。それらの話しを元にした上で、「へき地校体験実習」もへき地校理解に有効な契機になるととらえている。

この他にも、自由記述であげられた有効な方法として、「へき地の映像資料」「グループディスカッションとへき地体験企画作り」「自然の中での遊び・体験」「地域住民との交流および地域理解」などがあげられている。へき地を理解する取り組みとしては、へき地校訪問・へき地校体験実習などに加えて、映像資料・自然体験・地域体験なども有効であるととらえていることが分かる。

これらの施策や方法は、学生から見た学生時代における、へき地とへき地・小規模校理解の有効な方法である。赴任以前の学生時代にこれらの学習活動やへき地体験を進めることによって、学生時代に問題意識を持ってへき地教育をとらえるようになる。またそのことを意識し続けることによって、へき地・小規模校への赴任も抵抗感がなくなり、前向きな姿勢でへき地教育を担えるようになる。

7. 小括

以上のように、学生から見た若い教師がへき地教育を理

解し、へき地・小規模校に定着できる条件と方法をとらえてきた。また学生時代において、へき地理解を促進するために、何をしておかなければならないかを、学生の提案からとらえてきた。

これらはいずれも自由記述式で学生の意識調査を行った項目であるが、選択式にしなかった理由は、学生がへき地に対するマイナスイメージを潜在的に持っている中で、より率直な意見をとらえるためである。自由記述式であれば、自ら効果がないと思う取り組みは、まったく書かないので数字には表れない。また微妙な書き方の違いは、微妙な意識の差の違いによるものであり、それらの自由記述の一つ一つを丁寧に、段階的に分類していくことによって、選択式の項目ではとらえられない意識の程度をとらえることができる。

若い教師が多いへき地・小規模校では、教職員の指導力量を高めていくことが、若手教師にとってまず定着して居心地の良さを感じる最大の条件となる。そのためには、一般的にどこの学校でも同様であるが、研修会・勉強会も重要になる。また学校現場では、先輩から学ぶことが多いために、授業参観や経験談の交流も重要な条件となる。

若い教師にとっては、人間関係を高められるような居場所のある学校の雰囲気が、自らの成長にとって重要になる。そのためには、子どものことを話題にした話し合いの場や、飲み会・レクリエーションなども、へき地校での定着の重要な条件となる。

またへき地では、学校と地域の関係が強いために、地域に溶け込める教師の資質と条件が、へき地での居心地の良ささと定着度を高めていく。このような交流の機会を意識的に増やすことが重要である。

そして最後にこのような若手教師の定着を図るための、学生時代におけるへき地理解の促進条件をとらえた。学生から見た、へき地理解のための方法としては、「へき地のマイナス面の言説への意識転換」「へき地の特性・良さの認識」「へき地校訪問」「直接へき地の話しを聞く」「へき地校体験実習」などが多かった。これらは、大学の中で取り組める学習活動・体験活動であり、このような活動をへき地教育のプログラムの一環として、大学の中で体系的に取り組んでいくことが求められる。逆にこれらのへき地理解の取り組みを、さらに大学の中で体系的に組み込んでいくことによって、新卒教師・若手教師のへき地に定着する取り組みを強め、教師教育活動の再生産を高めていくことができる。

参考文献

- 小野寺武男著『辺地・小規模校の学校づくり』明治図書、1992年
日本教師教育学会編『教師として生きる-教師の力量形成とその支援を考える』学文社、2002年